

# 『ちびくろサンボ』は、すこやかによみがえりうるか

## —原作と改作をめぐる差別問題—

馬内里美\*

### Can Little Black Sambo be Revived Liberated from Racism?

— The Revised Versions of the Story Have New Problems —

MAUCHI Satomi

#### 1. はじめに

2005年、瑞雲社という出版社から『ちびくろ・さんぼ』が出版された。岩波書店が1953年に、岩波の子どもの本シリーズ第一冊目として刊行して以来、日本の多くの子どもたちに読まれてきた『ちびくろサンボ』のスタンダード版と呼べるものの復刻版である。1988年、アメリカの新聞記事を契機として、多くの出版社による『ちびくろサンボ』はすべて絶版になった。90年代後半に入り、改作がアメリカ、日本で発表され、1999年には、日本で初めてヘレン・バナマンによる原作が出版された。そして、2005年日本のスタンダード版が復刊された。これにより、絶版騒動に端を発した日本における『ちびくろサンボ』問題は一巡したといえる。

『ちびくろサンボ』は名作として読まれていた。それが突然人種差別の嵐に巻き込まれ、絶版に追い込まれることになった。名作ゆえに議論も沸き起こり、改作等新しい話題が出るたびに注目された。そして絶版から16年余り後に、スタンダード版が復活した。拙論は、この復刊を機に『ちびくろサンボ』問題を再考する。いったい、『ちびくろサンボ』の何が問題なのか。そして改作により、問題は解決されうるのか。拙論では、原作、日本の標準である旧岩波書店版、アメリカおよび日本の改作を検討していく。<sup>1</sup>

---

\*東北文化学園大学総合政策学部講師 Lecturer, Tohoku Bunka Gakuen University.

e-mail: s.mauchi@pm.tbgu.ac.jp

<sup>1</sup> 拙論では、原作を含め全般を『ちびくろサンボ』とし、以下、『サンボ』と略記する。また、作者ヘレン・バナマンによる原作 *The Story of Little Black Sambo* を「原作」、瑞雲社版『ちびくろ・さんぼ』を「旧岩波版」、改作はそれぞれの主人公の名前で呼ぶ。

## 2. ヘレン・バナマンと『ちびくろサンボの物語』

作者ヘレン・バナマン Helen Bannerman は、1862 年、スコットランドの中心地、エディンバラの豊かなエリート階級の家にも生まれた。父は、スコットランド連隊付きの牧師で、ヘレンは子ども時代を大西洋の島ポルトガル領マデイラで過ごした。12 歳のとき一家はエディンバラに戻る。彼女は成績優秀で、当時の女性としては高い教育を受けている。彼女はインド医務官職に就くウィル・バナマンと結婚し、夫の任地である植民地インドで三十年暮らした。

『ちびくろサンボの物語』*The Story of Little Black Sambo* はヘレンが幼い娘たちのために描いた挿絵入りの物語である。酷暑期のインドは英国人にとって厳しい。そこで、高原に避暑地を開発し、その期間のみ移転するなどの措置がとられた。ヘレンもこうした健康上の理由から、自身は夫の任地マドラス（現チェンナイ）に残りながら、5 歳と 2 歳の娘たちを避暑地に送ることにした。娘を送り届けて戻る汽車旅の間に、話を作り、挿絵をつけて完成させたのが、『ちびくろサンボの物語』である。ヘレンは自分で製本した本を、避暑地の娘たちに送った。ヘレンには出版の意図はまったくなかったが、この本を見た友人が強く出版を勧め、ヘレンは版權を売らないことを条件に承諾した。しかし、出版業者がクリスマスにあわせ早い出版を望み、版權を売るよう迫った。こうした強引な出版業者の手法のもと、押し切られるように版權は売り渡されてしまった。ヘレンの伝記および、『サンボ』問題について書かれた『さよならサンボ 「ちびくろサンボの物語」とヘレン・バナマン』で、著者エリザベス・ヘイは、この版權譲渡が、後のアメリカでの人種差別的な『サンボ』絵本が出回る原因となり、ひいてはヘレンの原作が人種差別問題に巻き込まれた原因になっている、とみる<sup>2</sup>。

## 3. ヘレン・バナマンのインド人への態度

『サンボ』が差別的であると問題になるとき、著者ヘレン・バナマンの差別意識の有無も問題になる。作者が差別を意図して問題となる言葉を使った場合は、特に子供の読み物としては望ましくない。結論から言うと、ヘイの伝記から読み取れるバナマンは、信仰心に篤く、堅実な生活を好み、スコットランド人であることに誇りを持ち、主に教会を通して、インド人のための慈善活動に熱心にかかわる、まさに温情にあふれた模範的人物である。

植民地において、特に女性がインド人と接する機会は主に使用人との関係に限られる。ヘレンは使用人を使う上での気苦労はあったものの友好的な関係を保ち、使用人たちに対して思いやりにあふれている。バナマン夫妻は、暮らしぶりも堅実で、教会や在印スコットランド人団体の会員として熱心に活躍した。特に教会活動には熱心で、インドのキリスト教徒と友好を深め、貧しいインド人女性や子供たちのための奉仕活動に力を入れた<sup>3</sup>。

<sup>2</sup>ヘイ、152-175 頁。

<sup>3</sup>同上、202-208 頁。

ヘレンは英国で教育を受けている娘たちに、貧しい子供たちの学費のスポンサーになってはどうかという主旨の手紙を書いている。「あなたがたは、このことをインドにあなたがたの援助の手をさしのべるひとつの方法と考え、インドを神さまの王国へと導くお手伝いをしなければなりません。<sup>4)</sup>

また夫のウィルも息子にあてた手紙で愛郷心とスコットランド人としての使命を訴える。世界中のさまざまな土地へ、その地を治め、人々が幸せになるように援助に出かけていった偉大なスコットランド人たちと故郷に誇りを持ち、スコットランドのために善き行いをし、偉い人になるように努力しなければならない、と。ヘイはこれに対して、次のように述べる。「高揚期における帝国主義者の使命そのものであった。この確信と献身的な態度に啞然とする他ない。<sup>5)</sup>

またヘレンとウィルは、長女が成長しインドに戻ってきた頃、新しく任命されたインド人主教による説教に喜んで耳を傾けた。ヘレンはインド人も教会の権威ある立場につくべきだと考え、慈善活動を通じて民衆と接し続けている<sup>6)</sup>。

ヘイの記述から読み取れるヘレンは、蔑視から程遠く、インド人に対してかなり献身的にかかわっている。バナマン夫妻に共通するのは、世界中で活躍するスコットランド人同胞への誇りとキリスト教の隣人愛にもとづいた使命感である。インド人への態度の根底に見られるのが、この愛郷心と信仰に基づいた使命感であるように思われる<sup>7)</sup>。

#### 4. サンボという命名

『サンボ』の問題として現在まず挙げられるのが、西欧社会で歴史的に黒人の蔑称であるサンボという名前である。岩波書店の絶版決定の理由はサンボおよびマンボジャンボの名前である。黒人差別の歴史に疎い日本人読者としては、慣れ親しんできた名前が差別的であると批判されても、なかなか納得できない。むしろサンボ、ジャンボ、マンボという語感の面白さから、サンボたちの名前を擁護したくなるだろう。バナマンの命名の理由に、これらの語がもつ響きの面白さがあったことは容易に想像がつく。題名でもある主人公の名前は、単純な物語であればその中で大きな位置を占める。しかし、人種差別批判を受けている名前は、たとえ作者に悪意なく語感の面白さだけで選択されたとしても、無垢なままではいられない<sup>8)</sup>。

ヘイは、バナマンの命名のヒントになったと考えられる本として『マンゴ・パークの冒険記』(The Travels of Mungo Park) を挙げている。1816年初刊のスコットランド出身のマンゴ・パークのアフリカ探検記には『サンボ』に通じるものが見られる。王にこうもり傘を献上し、

<sup>4)</sup>ヘイ、222-223 頁。

<sup>5)</sup>同上、299-300 頁。

<sup>6)</sup>同上、336-338 頁。

<sup>7)</sup>ただし、自覚的な差別感がないという理由で、作品が差別から自由であるとは言えない。これについては後述する。

さらに青い上着も献上させられたこと。別の王の二番目の息子サンボ・セボに供物を強要されたこと。マンボジャンボという奇妙な化け物に扮したものが執り行う懲罰の儀式のこと。これらの例を挙げ、ヘイは、バナマンがエキゾチックな響きを持つ名前を探すにあたり『マンゴ・パークの探検記』から名前を借用した可能性はありうるとする<sup>9</sup>。

しかし、それに続けて、ことばにまつわる悪感情が問題だとして、サンボという名前のもつ歴史にヘイは言及している。サンボは奴隷制度における主人からの名前の強要で男性の奴隷につけられるようになった名前のひとつである。このような名前は黒人男性の通称名となり、黒人のステレオタイプと結びついた<sup>10</sup>。

ジョセフ・ボスキン著『サンボ——アメリカの道化の盛衰』によれば、サンボは、まずミンストレル・ショーの重要な登場人物である。このショーは19世紀にアメリカで流行した大衆演劇で、白人が顔を黒く塗り黒人に扮して黒人奴隷の生活を滑稽に描いた。1830年代にアメリカで始まり、60年代までには、英国でも家族向け娯楽として人気を博した。そこに登場する道化とエンターテイナーを兼ね備えた重要な登場人物の名前がサンボであり、1880年代から1920年代の間、サンボは Rustus, Uncle Remus について黒人男性への喜劇的名前として最もよく使われた<sup>11</sup>。

サンボという名前の物語が登場したときには、すでにその名前には人種にまつわる歴史があり、作者の命名の無邪気さにかかわらず、差別問題に巻き込まれる運命にあったといえる<sup>12</sup>。

<sup>8</sup> アガサ・クリスティーの *And Then There Were None* (邦題『そして誰もいなくなった』) は初め *Ten Little Niggers* であり、アメリカでの出版に際して *Ten Little Indians* となり、さらに変えられ現在の題名になったという (ヘイ、76-77 頁)。この事実は、題名に問題があったときどう対処すべきかを考える上で興味深い。

<sup>9</sup> ヘイ、108-111 頁。

<sup>10</sup> 同上、111-112 頁。

<sup>11</sup> 同上、111-113 頁、Boskin, J. S. *Sambo: The Rise & Demise of An American Jester*. New York :Oxford UP, 1986. p. 42 quoted in Susina, p. 239.

<sup>12</sup> 題名に関して、“サンボ” ほどではないが、“Black” とつけられていることが問題であるとの指摘もある (村岡、73、85 頁)。しかし、Goldthwaite は、著書 *The Natural History of Make-Believe* で、原作を高く評価し、題名に関しては、Little Black Sambo でなければならない、として、Little Red Riding Hood (赤ずきん) との類似性を指摘している。

どちらも野獣に狙われ、どちらもあまりに幼くて無力である。どちらも色鮮やかな服を着ている。その上で、サンボはペローの話の裏返しではないかと推測する。そして、野獣に食べられないだけでなく、逆に最後には悪者を食べてしまう点で、木こりに助けられる受動的な女の子と異なり、サンボはトリックスターであり、ヒーローなのである。(Goldthwaite, p. 204-205.) 本論では扱わないが、この対比はジェンダーの問題へ発展しうる点で興味深い。

## 5. 描かれ方の問題

『サンボ』批判として、命名の次に挙げられるのが、挿絵である。バナマンの希望に反して著作権が売り渡されたため、特にアメリカで、印税を払うことなく、安易で質の低い、人種差別的な挿絵の本が出回るようになった。ニューヨークの子ども図書館の司書フィリス・ユールの『サンボ』研究書『ちびくろサンボ詳解』によれば1935年までに少なくとも30種の版があり、それ以降も20種以上の版が出ている<sup>13</sup>。アメリカでの大半の『サンボ』は絵の設定をなじみのあるアメリカ南部の黒人社会に定めたので、国内の人種問題を反映するようになった。ヘイは、旧岩波版も含め、アメリカ版『サンボ』の絵の多くはステレオタイプで黒人を奴隷のイメージに閉じ込めてしまうと考える<sup>14</sup>。本論では、バナマンと旧岩波版のドビアスの挿絵に限定して、評価と問題性を述べる。

バナマンの挿絵に対しては賛否両論ある。ヘイは、バナマンの絵を擁護する。バナマンの絵画法は戯画化であり、彼女が絵を描くと戯画（カリカチュア）になったと述べる。自分自身を含め、家族をも特徴を誇張して、戯画化を楽しんだ<sup>15</sup>。また問題は、バナマン以外の画家が登場人物をアメリカ南部の風俗に移しかえたせいであるとする<sup>16</sup>。日本でバナマンの原作の出版に際し監修・翻訳を手がけた灘本昌久は、彼女の挿絵および絵手紙の絵を高く評価する。彼は後述するピンクニーやマルチェリーノの改作と比較しながら、バナマンの挿絵のすばらしさを訴える<sup>17</sup>。一方、ポストコロニアリズムの観点から『サンボ』を論じたJan Susina（以下スシナ）は、出版を意識せず娘達のために描いた素人の絵として、バナマンの絵を、改作を手がけた（カルデコット賞受賞または複数回の次席という）実力のある画家たちと技術面で比較するのは公平ではないと擁護はするものの、原作者によるサンボの両親の描写を問題視する<sup>18</sup>。

具体的にバナマンの挿絵の内容を検討すると、まずトラのいるジャングル、バターはギーと呼ばれることからみて舞台はインドであると考えられる。主人公もインドの子どもに見える。彼の驚く顔の稚拙さはそれなりの味わいもあり、ここでは問題にしない。しかしながら、両親の姿はアメリカ南部の黒人奴隷に見える。母親マンボはバンダナを着け、アメリカ南部の女性

<sup>13</sup> ヘイ、99頁。『サムとトラ』の画家ピンクニーも調査し、50種類もの異なる本があると、前書きで述べている。また日本での『サンボ』の版を調査した竹内氏によると、岩波版以来日本で出版された『サンボ』の版は49にのぼり、アメリカでの版の数とほぼ同数である（村岡、99頁）。

<sup>14</sup> アメリカの『サンボ』絵本については以下を参照されたい。ヘイの第4章「アメリカでは非難的的に」96-123頁、村岡72-87頁、灘本（1999）の第2章「反サンボ運動の論拠 アメリカ・イギリス・カナダ」。

<sup>15</sup> ヘイ、106頁および182-188頁

<sup>16</sup> 同上、361頁。

<sup>17</sup> 灘本（1999）、140-144頁および174-180頁。

<sup>18</sup> Susina, p. 242.

に見える<sup>19</sup>。父親ジャンボはパイプをふかし、上下色違いだが縞のスーツを着ていて、アメリカの見世物の芸人のように見える。スシナはボスキンを引用して、バナマンが minstrel・ショーから借用したのかもしれないと推測する<sup>20</sup>。

ヘイは、『サンボ』の出自に関する新しい証拠を紹介している。それによると、79 歳当時、バナマンは、『サンボ』をインドの話として分類すべきか、黒人の話として分類すべきかとの問合せに、子どもたちに馴染み深いインドが舞台で、黒人の男の子は、娘たちが遊んでいたゴリヴォグ人形からヒントを得たと書いている<sup>21</sup>。実際には主人公はインドの子どもに見えるが、バナマンは人物の戯画化にあたり当初、minstrel・ショーを意識していたかもしれない。しかし、驚いたり、泣いたり、喜ぶサンボは、戯画化において表情が誇張されることになった。一方、脇役の両親だけがステレオタイプの minstrel・ショー的に描写されることになってしまったのかもしれない。

次にアメリカ版『サンボ』の代表として、ドビアス版の挿絵を検討する。代表とするのは、日本のスタンダード版であるし、ヘイによれば日本に数多くあった絵本もたいていはドビアスに追従しているからである<sup>22</sup>。ヘイは、次のように指摘する。

私は一九九〇年三月はじめて日本を訪れたが、そのとき日本人が戯画化を好むことを発見した。・・・日本人は・・・実際の姿を歪曲して“かわいい”、あるいは“なじみやすい”かたちにするのを好む<sup>23</sup>。

ヘイは、ドビアス版を日本人が好むことに理解を示すが、人種差別の時代の挿絵に低い評価を下す<sup>24</sup>。原色を用い、単純化されたデザインは子どもたちにはわかりやすい。翻訳を手がけた光吉夏弥生は、古めかしい原本ではなく、子どもたちに魅力のある絵として彼が所有していたドビアスの絵を採用した<sup>25</sup>。ドビアス版の日本での受容の時代的背景として、1950 年代、60 年代に絵本の挿絵がデザイン風になり、明るく大胆になったことを灘本は指摘する<sup>26</sup>。

ドビアス版人気のもうひとつの理由としては、西洋の伝統的な黒人のイメージが、すでに日本のデザインに定着していたのかもしれない。現実には黒人を目にする機会のない第二次世界大

<sup>19</sup> 灘本はバンダナの差別性について紹介し、かつ反論している。(1999 年、133-138 頁)

<sup>20</sup> Susina, p. 239. ちなみにボスキンは、バナマンのサンボは、ステレオタイプ化されたサンボではなく、物語の筋自体は主人公の品位を貶めるものではないが、題名と挿絵が物語の筋を不明瞭にすると述べる。  
(Boskin, p. 109 quoted in Susina, p. 239)

<sup>21</sup> ヘイ、177-179 頁。

<sup>22</sup> 同上、39-40 頁。

<sup>23</sup> 同上、15 頁。

<sup>24</sup> 同上、36-38 頁。

<sup>25</sup> 灘本(1990 年)、39-40 頁。

<sup>26</sup> 灘本(1999 年)、147-149 頁。

戦前から、黒人は生身の人間ではなく、もっぱらデザイン化されエキゾチックな非現実的存在として戯画化され、その結果、日本人はキャラクターとしての親しみを感じるようになったのではないか。つまり黒人はデザインの領域に封じ込められたのではないか<sup>27</sup>。

『サンボ』絶版の発端も戯画化された黒人キャラクターであった。1988年7月22日『ワシントン・ポスト』紙の日本の人種差別の批判記事である。「黒人の古いステレオタイプが日本で息を吹き返す。販売会社はサンボ人形、黒人マネキンを弁護し、人種主義を意図したものではないと主張」との見出しの記事で批判されたのは、サンリオのキャラクター商品「サンボ・アンド・ハンナ」と、顔が戯画化されている黒人のマネキン人形であった。この批判に加え、政治家の人種差別的な発言が問題を深刻化させた。そして、ある家族が「黒人差別をなくす会」を結成し、『サンボ』を出版している出版社に抗議の手紙を送った。その結果、各出版社が絵本の回収、絶版を決定した。

ボスキンによれば、アメリカでも、サンボは今でいうキャラクター商品のキャラクターのように広告宣伝の類から、トランプなどのカード類などさまざまなところで使われた<sup>28</sup>。日本では黒人キャラクターのデザインが、生身の人間に会うことなく定着していたのかもしれない。その例として挙げられるのが、サンボ騒動を受けて同じく廃止となったカスピス黒人キャラクターである。このマークはカルピス食品工業の創業者が、第一次世界大戦で困窮していたヨーロッパの芸術家を援助するためにポスターを募集し、1924年に同社のシンボルマークとして用いたことに始まる。ドビアスの『サンボ』とほぼ同時期である。彼は1902年オーストリアに生まれウィーンの工芸学校と美術学校で学び、1924年頃アメリカにわたり帰化し、1927年にマクミラン社版『サンボ』のイラストを手がけている。灘本は、ドビアスの単純化されたデザインは当時のアール・デコの影響を受けた時代の産物として、差別的意図によるのではないと擁護する<sup>29</sup>。このように黒人が単純化されて描かれたデザインは日本でも受容され、それが岩波版サンボの挿絵に対する日本人の愛着になり、非現実的に黒人が真っ黒に描かれていても、デザインとして優れていれば積極的に好むというのが日本人の感覚であろう<sup>30</sup>。

<sup>27</sup>ヘイ、38-41頁。

<sup>28</sup>同上、112-113頁。

<sup>29</sup>灘本(1999)、147-149頁。

<sup>30</sup>2007年初めにある店で、ドビアスのサンボの挿絵のついたマグカップを見つけた。ドビアスの絵がイラストとして好まれうることの証左であろう。また同時期NHKの「みんなのうた」の特別番組で、特に人気の高い歌が紹介された。そのひとつ「南の島のハメハメハ大王」は、アニメーション自体は、紐などで人物を表現し、動きの巧みさと相俟って視覚的には魅力的である。だが、「ハメハメハの奥さん」は上半身裸として描かれている。これは現在では明らかに差別的表現であるといえる。歌自体も、南の人はおおらかに愉快な人間に描かれていて、「ハメハメハ」の繰り返しとともに楽しい歌として子供たちに喜ばれるのは理解できるが、やはりこれも差別的であると批判の対象になりうる。

## 6. 多人種社会からみる歴史的文脈

インドを舞台にアフリカ人の特徴を持つ人物の配置の矛盾・非論理性に関しては、早くも出版年の 1899 年クリスマスシーズンに有力週刊誌『スペクテイター』の好意的な書評で言及されている。書評によれば、幼い子どもたちを楽しませること、そのために物語は創作され、矛盾を気にしていない。むしろ非論理性はファンタジー性を強め、空想の世界に物語を設定しようとするものである<sup>31</sup>。

しかし、植民地インドで、インド人を主人公とした物語を、英国人が描くということには、たとえ子供向けの無邪気な童話でも、誰が誰を書いたのか、作者のおかれている時代と社会がどのように作品に影響を及ぼすかという観点から見ると、歴史的な存在となる。ポストコロニアルの視点からは別の読み取り方ができる。

インドとアフリカの要素の共存または混同は、インド人とアフリカ人は置き換え可能、もしくは同一視できるという印象を与える。それは単に印象だけではなく、むしろ当時の英国人にそのような意識があり、それが『サンボ』に反映されているとも考えられる。コロニアリズムもしくは植民地支配のメンタリティー、すなわち、支配する側は、支配される側に対し優れており、権威があるとする思考態度が、『サンボ』に読み取られるのである。支配者と被支配者の区別は明らかだが、被支配者は同じようなものに捉えられうる。

ポストコロニアリズムの視点からスシナは、『サンボ』には執筆当時の帝国主義的想像力や植民地支配の使命が反映されていると論じる。『サンボ』のインドとアフリカの要素の共存は、どちらも西洋の視点では単に「他者」であること意味し、彼らは、白人より弱く、支配され、文明化されなければならないという植民地支配の心性の現れである<sup>32</sup>。この背後には、植民地を捜し求め、そこで天然資源を搾取する西洋の帝国主義がある。その「経済と領土に対する野心は、文化的、知的、道徳的用語で、野蛮人を文明化し西洋文化のあらゆる恩恵を受けるといふ博愛的な願望として表現された<sup>33</sup>」。このような視点からは、バナマンのインド人観が、いかに善良であろうとも、帝国主義の枠内に収まっていることが理解できる。ミンストレル・ショーの要素を物語に取り入れたのも、蔑視の意識がなくとも時代を反映している。その意味で、原作は植民地支配時代の産物であると言えるのである。

アメリカではもっぱら蔑称と人種差別的戯画化の問題として捉え、日本も同様に捉えている。そのためあまり知られないが、英国では、執筆態度が問題とされている。それは、原作以外の版がほとんど出回らない英国では、上記のアメリカの問題をあまり共有していなかったことと、その帝国としての歴史的背景からであろう。英国では、1950 年代から 60 年代にかけて移民の大量流入が続き、移民の子どもたちにどのような本を提供するか関心が払われた。1972 年、前年に設立された「人種差別に反対する教師の会」が、バナマンの絵本の箱入りセット刊行に抗

<sup>31</sup>ヘイ、175-177 頁。 Susina, p. 243.

<sup>32</sup>Susina, p. 240-243.

<sup>33</sup>Xie, p. 7.



議の手紙を書いた。英国の多民族社会において、人種差別的態度が色濃く現れている作品は、社会に有害で危険であるとして、作品の流通に反対した。対して出版社は、特定の思想に基づく児童書の出版規制に反対する返事を出した。その後、『サンボ』論争は『タイムズ』紙の投稿欄をにぎわすことになった。擁護の立場が多かったが、反対の意見として、移民やその子どもの側から、‘子どもじみた人種’に対する温情主義的親しみや、保護者的な態度に対する不快感が表され、多人種社会にふさわしくないとの見方が示された<sup>34</sup>。

児童図書館員のジャネット・ヒルは、英国では、アメリカのように「サンボ」という言葉が汚い言葉として広く使われていない、として『サンボ』を図書館で開架しても良いとの考えを1967年には示していた。しかし、『タイムズ』論争の半年後の1972年11月に、多人種社会のなかの問題として『サンボ』を批判することになる。図書館周辺の黒人の声を聴き、彼らの『サンボ』などへの違和感を確認しながら、『サンボ』を歴史的文脈から捉える。そして、「ヘレン・バナマンの著作は長く生き永らえてきた。もう忘却に委ねる時ではないか。それらは多人種社会の中では居場所がないのだ」と書いた<sup>35</sup>。

彼女の意見は子どもの本に関心を持つ人々の主たる見解となっていっていった。70年代の英国では、人種差別を克服すべく努力がなされた。その過程で、人種差別反対のガイドラインに外れる本は図書館から排除されるようになった。こうして『サンボ』は「日陰もの扱い<sup>36</sup>」されるようになった。

## 7. 『サンボ』の改作

日本での『サンボ』絶版後の1996年に、アメリカで二点の改作がほぼ同時期に出版された。Fred Marcellino（以下マルチェリーノ）の挿絵による *The Story of Little Babaji* (邦題『トラのバターのパンケーキ』、以下『ババジ』) と、Julius Lester (以下レスター) 著・Jerry Pinkney (以下ピンクニー) の挿絵の *SAM AND THE TIGERS* (邦題『おしゃれなサムとバターになったトラ』以下『サムとトラ』) である。また日本でも森まりも作『チビクロさんぽ』(以下『チビクロ』) および上記二点の翻訳が出版され、原作出版百周年に当たる1999年には灘本により、原作の版復刻および翻訳も紹介された。次にこれらの改作を紹介および疑問点を挙げたい。

## 8. パステルカラーのインド

マルチェリーノは『長ぐつをはいた猫』の挿絵で1990年カルデコット賞を受賞している絵本画家である。彼は「原作は小さな傑作で」あり、「その優れた資質は人種差別的要素を凌ぐ」と言う<sup>37</sup>。そこで彼は、簡潔な文章はそのままにし、登場人物にインドの名前をつけ、原作に

<sup>34</sup> へイ、66-83頁。村岡、87-92頁。

<sup>35</sup> 村岡、92-95頁。

<sup>36</sup> へイ、84-94頁。

<sup>37</sup> Luscombe, p. 49.

はない背景を丁寧に描き舞台がインドであることを明確にした。名前や舞台をインドにする試みはマルチェリーノが初めてではない<sup>38</sup>。指摘されている問題点を改める点で、無難な改作と言える。

まずサンボはLittle Babaji（以下ババジ）、母親はMamaji、父親はPapajiと変えられている。母親はサリー、父親はターバンを着用している。原作と比較して父親は対照的である。芸人風のジャンボに対し、ババジは鍛冶職人である。トラのバターを集めて帰ることにつながる点で巧みな改変である。

『ババジ』は主要な『サンボ』の問題を解決し、絵も丁寧に、好感のもてる絵本に仕上がっていることは確かである。しかし、一見インドらしいのだが、気をつけてみると「インドらしい」に、とどまっている。

まず名前であるが、三人の名前は語感の統一ということでは工夫がみられる。しかし、語尾の「ジ」は敬称であり、子どもにふさわしいのか。「ババ」も固有名詞ではない。登場人物の顔つきは、インド人の多数を占めるインド・アーリア系よりむしろモンゴロイド系のように見える。多民族国家インドでは北東部にみられそうな風貌である。服装も厳密には正確ではないように見える。また背景からは、北西部に見られそうな城塞都市に住んでいることが読み取れる。そして部分的で断定はできないが、北インド型の寺院も見られる。インド国内の複数の地域性は、インドとアフリカまたはアメリカ南部の黒人の混同ほど問題ではない。しかし、アメリカでのインド系住民の存在感が増しつつある今日では考慮すべき問題になるかもしれない。

『サンボ』批判に、どれも異なるけばけしい服の色は、黒人の悪趣味、野蛮さを表すというものがある。しかし、これは物語である。全体のコーディネートを検討し色数を抑えるのが現実には洗練された着こなしであろうと、それを物語に持ち込むのは野暮である。子どものための物語では、それぞれ色が異なるゆえに魅力が増すのである。マルチェリーノの挿絵は、淡い色調で描かれ、洗練された心地よい美しさがある。しかし、派手な色が野蛮であるという批判は、鮮やかな色を好む文化への偏見ではないか。インドは、特にバナマンが暮らした南インドでは鮮やかな色が好まれる。日本の紅白の垂れ幕のように会場を設定する際に用いられる幕はサンボの服装のような色のコントラストの強いパッチワークである。サンボの服の色はシルクのサリーを思わせる。インドでは、淡い色調の刺繍や染色は、英国統治時代に英国婦人の好みに応じて作られるようになったという。たとえば言うならば、マルチェリーノの挿絵は西洋人の好みに合わせて作られた淡い色調の多色使いの刺繍のショールのようなものである。一方、バナマンの挿絵は南インドの鮮やかな色の無地のサリーのようなものである。

マルチェリーノのインドは実際の風景や人物に基づいているのではなく、エドワード・サイードが「オリエンタリズム」と呼ぶ、ヨーロッパ人の発見した東洋である。より厳しいBaderはマルチェリーノの想像上のインドを「砂糖をまぶしたタージ・マハルの世界のディズニー化された世界」と呼ぶ<sup>39</sup>。

<sup>38</sup> ヘイ、117頁。村岡、74ページ。

スシナはこのように述べた後、マルチェリーノ版について次のように締めくくる。

マルチェリーノのババジはバナマンの問題点を改変するかもしれないが、新しい問題を導入し、より現実的なコンテキストを物語に提供するより、むしろインドとインド人についてのヨーロッパ的思い込みを活用しながら、植民地支配のテキストにとどまっている<sup>40</sup>。

ファンタジーに現実的な描写が求められるべきか、疑問が残る。しかし、異なる文化や人々を描くファンタジーは問題を抱えることになりうる。1978年に「世界教会協議会」が本の選定上の基準を示したガイドラインを出した。ヘイがその一部として、三十近くの項目を列挙している<sup>41</sup>。「他者」を描くこと自体が問題をはらむとしたら、異文化を舞台とした物語は厳しい批判を覚悟しなければならない。問題解決として考えられるのは、描かれた「他者」が、自ら自分たちの物語として書き直すか、または、物語から人間の要素を取り除くことではないか。その例として、次の二点の改作を検討する。

## 9. 黒人の黒人のための黒人による改作

『おしゃれなサムとバターになったトラ』(以下『サムとトラ』)は、それぞれ実績のあるジュリアス・レスターとジェリー・ピンクニーが協力して作り上げた作品である。二人ともアフリカ系アメリカ人で、レスターは黒人問題への発言で知られ、ピンクニーはカルデコット賞も受賞している。二人は『サムとトラ』以前にすでに高い評価を受けている合作を世に出している。

『サムとトラ』合作の経緯について、ピンクニーが序文に書いている。興味深いことに二人はそれぞれ別に『サンボ』に興味をもち、それまでの『サンボ』を調べ、自分なりの『サンボ』を作ろうとしていた。ピンクニーが関心をもっていることをレスターがインターネットで知り、合作を提案したという。作られるべくして作られた共同作品であるといえよう。

レスターは、あとがきで『サンボ』の歴史、原作の評価そして改作の意図について述べる。ヘレン・バナマンは人種差別的な意図をもって書いたのではないだろう、とした上で人種差別という「歴史的なお荷物」(historical baggage)を背負っているとする。二人は子ども時代に『サンボ』を読み、黒人のヒーローだと思った。しかし、名前と描かれ方が主人公の英雄の地位を奪った。そこでレスターは「歴史的なお荷物」を降ろして、しかも面白さを保つ新たな語り方を模索した。まずサムという元の名前の一部であり、かつアメリカの名前として自然な名前を考えていたところ、不意に「サムサムサマラ」という言葉が口をついて出て、同時に、人間は皆サムという名前にしてしまうことを思いついたという<sup>42</sup>。

<sup>39</sup>Susina, p. 242. 引用は Bader, Barbara. "Sambo, Babaji, and Sam." *Horn Book* (Sept/Oct. 1996): 536-547, p. 544.

<sup>40</sup>Susina, p. 243.

<sup>41</sup>ヘイ、87-90 頁。

<sup>42</sup>偶然にも、語感と、名前が皆同じという点は「ハメハメハ」に似ている。

またバナマンの単純な語り口に対して、自分にとってもっと自然なアメリカ南部の黒人の語りを選んだ。これは二人の合作シリーズ『リーマスおじさんの物語』(*The Tales of Uncle Remus*)も使った語りである。二人にとっていちばんの難題はこの本が背負っている歴史だが、想像力という真実がこの物語に存在すると結ぶ。

スシナは、『サムとトラ』が、彼らのそれまでの合作同様に、白人によって作られた黒人を主人公とする物語を、自分たちのものにする試みであると論じる。人間と動物が共存するファンタジーの世界だが、時代設定は1920年代、1930年代のアメリカ南部の田舎である。これは『リーマスおじさん』の舞台である。そしてその物語に登場する動物たちがさりげなく『サムとトラ』に紛れ込んでいる<sup>43</sup>。ピンクニーの挿絵は丁寧に描かれ、特にトラたちが駆け回る場面は大型絵本ならではの迫力にあふれている。『ピーターラビット』の絵本のサイズにも影響を与えたといわれる原作の、子どもの手のひらに収まるようなサイズと対照的である。

顕著な変更のひとつは、『リーマスおじさん』ですでにレスターが用いた現代の南部の黒人の語りである。原作の”Now I’m the grandest Tiger in the Jungle!”に対して、サムから奪った服を着ながら、トラは”Ain’t I fine!”と叫ぶ。原作は5歳と2歳の娘のために作られた物語なので、サンボも小さいし、文章も簡潔だが、サムは、学校へ行き、読者も小学生あたりが想定されているようで、文章も原作に比較して長くなっている。

内容の違いとして顕著なのは、サムの自立志向と、その表れとしての服へのこだわりである。サムは自立志向が強く、親が買い与えようとする服を拒否し、自分らしさのために自分で服を選びたいと主張する。原作にはない黄色のシャツを含め、自分で選ぶ。服にはそれぞれ「しあわせいっぱい きぶんのような すてきに あかい うわぎ」というように長い修飾語句がついている<sup>44</sup>。

サムの自分らしさ追及は、現代社会の新たな問題を反映しているように思われる。白人に描かれた黒人の物語を黒人の手によって書き改めることで、黒人のための物語に変えるという試みは、植民地支配の問題から『サンボ』を解放する。ガヤトリ・スピヴァクの表現を用いれば、サムは自分の語りを獲得して語るできるようになった「サヴァルタン」である<sup>45</sup>。しかし、バナマンが意図しなかっただろうとしても、時代性がおのずから表れるように、レスターの『サムとトラ』も、彼の意図にかかわらず、現代の問題が読み取れる。それは消費の問題である。

サムの両親は、茶色の上着と白いシャツを買おうとする。それに対して「自分らしくなくなってしまう」と反対し、自分で服を選ぶほど大きいのだから、と自己主張する。親が予想以上

<sup>43</sup>Susina, p. 244-247.

<sup>44</sup>原題の単純な *SAM AND THE TIGERS* と比較して、邦題は『おしゃれなサムとバターになったトラ』とかなり長い。「おしゃれな」サムにし、長い修飾語句を伴い、サムの服の表現に呼応している点で、邦題はレスターの文体の特徴を反映している。

<sup>45</sup>Susina, p. 248.

の出費もようやく終わり安堵しかけるところ、さらに傘を買う。こうなれば、従来の教訓話では、身分不相応の贅沢を戒めるため、トラに服を取り上げられて当然である。現代のサムは消費社会の主人公である。親の懐具合の心配をよそに、買い物を続けるサムは消費者教育が必要だと心配したくなるほどの着道楽である。「あしたみたいに あかるい」というような服につけられる表現は、作者レスターの表現なのか。サムの印象なのか。それとも売り手の宣伝文句なのか。自分らしさの追及は消費社会の罠ではないのだろうか。

消費を特にアフリカ系アメリカ人と関連づけるのは考え過ぎだろうか。2005年のアメリカ南部を襲ったハリケーンの被害が貧しい黒人に集中した。その理由の一つが、自宅からの逃げ遅れ、または居残りだが、彼らが自宅に固執する理由として聞いた興味深い説がある。黒人の低所得者は節約・貯蓄の意識が薄く、電化製品などの物品の購入に当てる。つまり家にあるものが彼らの財産だから、それを守るために避難をためらった。サムはこうした消費傾向を反映していないだろうか。

それとも次のように考えるのも考えすぎだろうか。サムの着道楽は、実は投資である。彼の買い物は、親の予算をはるかに超えているはずだが、結局これらの服のおかげでサムはバターを獲得する。つまり鮮やかな色の服という投資により成功する小さな実業家である。投資を入れずんば虎脂を得ず、とでもいうのか。

サムは、知恵で力の強いものを負かすトリックスターというアフリカ系アメリカ人の民話の伝統に連なるとスシナは述べる<sup>46</sup>。しかし、もう一つ気がかりな点がある。それはトラたちの位置である。トラたちはサムサムサマラの住人である。サムを彼の通学路で待ち構えるのであり、ジャングルという外界の存在ではない。最後のページは、動物たちを招待し皆でトラのバターで作ったパンケーキを食べる、大型絵本の良さを生かした場面である。ここで動物たちはトラが5頭行方不明だがどうなったのか噂をする。つまり、トラはならず者だが、共同体の一員なのである。ジャングルという外界の猛獣ではない。それをバターに変えて皆で食べてしまうという結末には後味の悪さが残る。レスターとピンクニーの改作により、勝利するトリックスターのアフリカ系アメリカ人の民話として、物語は再生を果たした。サンボが抱えていた歴史のお荷物降ろした。サムは人種問題から開放されたアフリカ系アメリカ人ヒーローとなる。しかしトラをどのように描くかという新たな問題が生じてくるのではないか<sup>47</sup>。

## 10. 人間の登場しない物語

日本では、改作として1997年に森まりも『チビクロさんぽ』（以下『チビクロ』）が出版された。主人公を黒い子犬にすることで、レスターが言う「歴史のお荷物」をおろした改作といえ

<sup>46</sup>Susina, p. 245-246.

<sup>47</sup> 今井美都子も、トラという他者の排除を問題視する。トラの位置がどこであれ、トラの問題、すなわち主人公とトラの問題は存在する。それについては後述する。

る。絵はより単純化され、『ババジ』や『サムとトラ』では丁寧に描かれているインドやアメリカ南部の文化的要素は一切省かれている。いわば挿絵において、アメリカの改作が「追加」によるものとしたら、『ちびくろ』は「省略」によるものである。森まりも、すなわち守一雄は改作の理由、経緯、提案について、『チビクロ』の別刷で次のように述べる<sup>48</sup>。

守は、「差別表現」であるかの基準として、三つの基準を考える。

1. 使用者の意図
2. 聴者の被差別感
3. 社会的基準

社会的基準とは、差別の対象と差別を感じる主体が別の場合で、不特定多数を読者とする本などの場合、この第三者を含めた差別の基準が重要になると、守は述べる。「一般の日本人にはこの本に差別的な部分はまったく感じられない」という主張は、国際社会では通用しない。また「日本人すべてが普通にもっている意識そのものが差別的であるために、差別が意識されないだけかもしれない」と述べる。

その上で、2、3のタイプの出版物には、問題となる箇所を適切な表現に改める解決法があるとする。『ちびくろ・さんぼ』については、絶版の前に十分な議論を通して差別について考えるべきであった、としながら、改作を提案する。守自身、アメリカの改作に言及しつつ、基本的に同じ考えによる取り組みだと考える。

『ババジ』が、原作と同様に欧米人がアジア人と描くという、「他者」という未解決の問題を、『サムとトラ』はアフリカ系アメリカ人が自らの物語として描き語り直す手段で解決しようとした。それに対して、守は、人間とその文化の要素を排することで、「他者」表現が抱える差別問題を解消しようとしている。『チビクロ』は日本ならではの改作である。主人公を犬に変える点だが、もともと『ちびくろ・さんぼ』という訳は、漫画『のらくろ』からの連想である<sup>49</sup>。犬を主人公とした漫画をもとに名づけられたのだから、主人公を「チビクロ」という黒い子犬に変えることは、日本人にとって自然である。問題となる「サンボ」の名前を、さんぼ、すなわち散歩に変えたところは日本語ならではのしやれである。いずれの改作も、それぞれ感心するような改変が加えられ、楽しいものである。

ただし、一方で失うもの、新たに抱えるものがある。『サムとトラ』が、主人公の尊厳を回復する代わりに、アフリカ系アフリカ人の物語に特定化したことで、原作の単純さゆえにもつ普遍性は、失われるかもしれない。その点で、『チビクロ』は、単純さゆえの普遍性を残しうる。守が幼稚園児を対象に行った心理学的実験で、改作は原作同様に面白いという結果になったのは、そのためであろう。しかし、『チビクロ』の変更点は日本ならのものであるといえる。余分なものを排し、何よりも主人公から人間の要素すら取り除くことで、人種問題を解消する。

<sup>48</sup> 守一雄、「『ちびくろ・さんぼ』の差別性をめぐって」『チビクロさんぼ』別冊、1-7頁。

<sup>49</sup> 灘本(1990)、34頁。

これは日本ではあまり抵抗がないが、動物と人間を峻別する欧米文化圏では、「他者」を一層下の動物に貶めると解釈されることになるという、新たな問題を引き起こしかねないのではないか。

## 1 1. トラとは誰か

『サンボ』の問題を論じる際、主人公の名前と描かれ方に関心が向けられ、そのため、トラに関心が及ばない。『サンボ』の問題を論じる際あまり指摘されないのだが、自滅するトラたちとの対比においては、主人公は明らかにヒーローである。肌の色はどうあれ、人間であり、動物のトラより優れているはずだ。トラとは何か、または誰か。サンボとトラの関係は何なのか。語りの真実は、しばしば、主人公よりも、その「敵」や「悪役」の描かれ方と、その主人公との関係に見られるのではないか。

その手がかりとなるのが、バナマンが書いたとされる一つの小説である。バナマンが大人向けに書いたものをヘイが探し、見つけ出した。1906年出版の本に収められている『わが友フラムジ』(以下『フラムジ』)である<sup>50</sup>。この短編小説は著者名を明らかにしないで発表されたが、バナマンの娘たちはヘイに著者はバナマンだと請合ったという。ヘイはこの作品を、ラドヤード・キプリングの影響が感じられ、インドならではの雰囲気があり、手に汗握るクライマックスを堪能できると評価している。しかしながら、この小説は『サンボ』以上に問題があり、また、この小説を通して『サンボ』のもつ問題も見えてくるのである。『サンボ』のように名前やイラストにではなく、話の筋自体が問題であるように思われる。以下、ヘイの紹介するあらすじを述べる。細部の面白さは不明だが、その分構図が明らかである。

イギリス人のダイヤモンド買い付け業者が極上のダイヤモンドを秘密裡に買う。パールシー教徒のダイヤモンド商人フラムジは、イギリス人を殺してでもそのダイヤモンドを奪おうと、パールシー教徒の鳥葬の場、沈黙の塔にイギリス人を幽閉し、ダイヤモンドのありかを白状させようとする。だが、イギリス人の機転により、彼は脱出する。逆にフラムジが閉じ込められる。イギリス人はイギリスへ逃げ出す。その際船中で、彼はフラムジになりすます。

しかし、よくみると、この話は『サンボ』の大人版であるように見える。フラムジとイギリス人の関係は、トラとサンボのそれによく似ている。二つの話に共通する構図もまた極めて類似している。主人公は命または宝を、敵に奪われそうになる、または実際に奪われる。しかし、主人公は自分の機転によって助かり、宝も獲得する。『サンボ』ではインド人が主人公、『フラムジ』では敵で、インド人の位置が異なる。しかし、主人公と敵の関係で見ると、二つの話は重なり、トラはフラムジに連なり、サンボはイギリス人に連なる。つまりトラ=インド人、サンボ=イギリス人となる。このような読み方をすると、『サンボ』は名前や描写という表面ではなく、構造的に問題があるといえる。トラとはインドの象徴となる動物で(ちなみに大英帝国を象徴するのはライオンである)、『サンボ』のトラをインド人として見ると、まさに植民

<sup>50</sup> ヘイ、294-296頁。

地支配の視点と呼べるものが見えてくる。

サンボは西洋の象徴である洋服や靴を身に着けて、ジャングルに入っていく。ジャングルとは、植民地化されることになるアジアやアフリカである。その未開の地には王、恐ろしいトラがいる。権力を持ち欲の深い王たちに、西洋の品々を献上しなければならない。西洋の物品の入手を巡り、王たちが争いを始める。そして取り入れようとした西洋の物・技術により彼らは自滅してしまう。サンボは積極的に立ち回らなかったが、奪われたものは無事回復し、王たちの宝も手に入れる。これは、奇妙なことに、大英帝国のインド支配の始まりを思わせる。

商業活動のためにインドに進出したヨーロッパの商人が、安全確保のために軍隊を本国に要請する。インドの藩王たちは、自分達の小競り合いに外国軍の協力を要請する。この軍事支援協力を契機として植民地統治が始まることになる。『サンボ』の話を当てはめると、サンボはイギリス商人であり、服は武器・軍隊である。トラは藩王、そしてトラのバターは藩王国、もしくはその国が産出する資源である。

一方、『フラムジ』が思い起こさせるのは、英国の植民地支配における、インドの資源の流出である。ダイヤモンドはインドの富または資源である。イギリス人業者のダイヤモンド獲得には組織、計画、策略等がみえる。つまり彼の力は大英帝国の植民地支配の力である。ダイヤモンドはたえフラムジのものではなくとも、インド産であり、フラムジ側に属する。フラムジはダイヤモンドを奪還しようとする。しかし、一枚上手のイギリス人は窮地を自力で脱出、フラムジは因果応報となる。あらずじでは理由は不明だが、帰りの船でイギリス人はフラムジになりすます。これは、トラのバターで作ったパンケーキをサンボが食べることに、重なるかもしれない。

二つの物語は構造が似ているものの、主人公の態度は、きわめて対照的である。サンボは子どもであり、受動的である。親に服を与えられ、服を差し出すことで命拾いをしたとはいえ、トラがバターになったのは、トラの虚栄心による自滅であり、サンボは傍観しているだけであった。そして、バターを拾い集めるのは父親である。サンボは漁夫の利を得るかたちでバターを得る。それに対して、イギリス人業者は、きわめて能動的である。極上のダイヤモンドを厳重な秘密裡に買うことは、きわめて有能な人物が、並はずれた意欲を持ち、能力を最大限に発揮し、細心の注意力を持ち合わせていることを意味する。また、彼は塔に閉じ込められるが、フラムジが食べ物と水を括りつけたロープを降ろしたとき、ロープを掴み、それで輪投げを作って、フラムジを逆に捕まえてしまう。機転も体力も持ち合わせている、まさに冒険小説のヒーローである。スシナは、受動的で女性的なサンボを、19世紀に書かれた白人少年の冒険小説と対比している。冒険小説では、インドやアフリカでの狩の成功が、「一人前の男性になるための知識、技術、勇気」の試練となるという John MacKenzie の説を挙げている<sup>51</sup>。『サンボ』

<sup>51</sup>MacKenzie, John M. "Hunting and the Natural World in Juvenile Literature." *Imperialism and Juvenile Literature*. Ed. Jeffery Richards. Manchester: Manchester UP, 1989. p. 147 quoted in Susina, p. 241.



が、このような冒険小説の子ども版で、『フラムジ』は大人版と考えられる。二人の獲得するものにも歴然とした差がある。いまや、服は消耗品となり、財産としての価値はない。飽食の時代に、高カロリー高コレステロールのバターは美容と健康の敵として敬遠されている。それに対して、ダイヤモンドはいまだ輝きを失っていない<sup>52</sup>。この子どもと大人の差、そして獲得品の価値の差は、植民地の初期と全盛期の違いと考えられるのではないか。

バナマンの執筆態度は不明であるが、まさに大英帝国の構図が露骨に見られる『フラムジ』は、時代を反映しているといえる。それに対して『サンボ』は、純粋に子どもを喜ばせるために母親が書いたささやかな物語であり、事実多くの子どもたちに愛されてきた。しかしながら、イギリス人の立場をインドの子供が演じているため、見えにくいものの、構図そのものは『フラムジ』と変わらない。時代の産物として、植民地支配のメンタリティーを内包しているのである。

## 12. 日本における『サンボ』差別論争

最後に、日本での『サンボ』論争を概略した上で、改作、原作、そして日本での標準版と出揃った今、改めて、日本人にとっての『サンボ』について述べたい。

日本で、『サンボ』の人種差別が指摘されたのは、早くも1965年に始まる<sup>53</sup>。すでに7種類の『サンボ』が出版されていたが、フレーベル館版の飯沢匡による再話が「大胆な改ざん、無神経な翻案」と、文学研究者によって批判された。それに対し、飯沢は、両親の名前とアフリカ人風描写が問題なので改ざんしたと反論する。それに対する文学研究者の反論は、植民地主義とアメリカの黒人問題は、すでに児童文学者の間で知られているとして、その上で、『サンボ』は黒人蔑視の感情を植えつける恐れはなく、優れた児童文学として評価されるべきとするものだった。

1970年代に入ると、再び児童文学者のあいだで、『サンボ』の人種差別の問題が論じられた。1973年、児童文学者、渡辺茂男が自身の欧米での図書館勤務と視察の経験と、英米での『サンボ』論争について紹介した。1950年代の移民地域での図書館のプログラムで用いた『サンボ』が72年には図書館から消え、話題すらタブー視されている雰囲気述べている。理由は、描き方がステレオタイプであるからだそうだが、日本人からはうかがい知れない人種問題の根深さとそれによる過剰反応を渡辺は感じている。

翌年1974年、月刊『絵本』12月号は『サンボ』を特集した。ほとんどの論者が、差別される側の痛みの視点から『サンボ』に否定的であった。

以上、日本での議論をみると、専門家の間では差別問題は知られて話題になるものの、出版

<sup>52</sup> グローバリゼーションの今日、ダイヤモンドの市場価値はいまだ高く、その利権をめぐり産出国であるがゆえに、平和と富を奪われている国もある。ダイヤモンドがもたらす皮肉な不幸を考えると、財宝獲得をテーマとした植民地時代の冒険文学は歴史を背負っているといえよう。

<sup>53</sup> 以下、灘本(1990年)、49-55頁。

規制の論議は出ていない。1970年代初めまでに、アメリカでは公民権運動の高まりを受け、また英国では移民による多人種社会となり、マイノリティーの立場を考慮する意識が高まり、人種差別的なものを意識的に駆逐しようとしていた。この動向は日本の専門家の間では知られていたが、1988年に突如『サンボ』の人種差別問題が突きつけられ、社会問題化し、理解と議論の余裕もなく、迅速な絶版措置が取られた。これは、多くの日本人にとって不幸なことではなかっただろうか。というのも、これにより、好きな本を奪われた読者という被害者の視点で『サンボ』問題を捉えるようになったのではないか、と思われるからである。

『ワシントン・ポスト』紙の記事の取材に同行した東郷茂彦は、「差別という問題を考える時には、加害者の立場に立つものが、自身の基準で判断を下してはならないのではないだろうか。」として、立場を逆に取った例を挙げる。江戸末期に来日した外国人が、日本の少年を主人公とした、子どもがとても喜ぶ本を書き、それが「Little Yellow Etta」という題名だったら、と問いかける<sup>54</sup>。

日本人読者の意識に欠けているのは、加害者の立場で考える態度ではないだろうか。もちろんほとんどの日本人が黒人と接する機会がない、またはなかったのだから、もち得なくて当然である。だが、人種差別の差別する側になっていないか、と省みることも、差別される側の気持ちになって考えてみることも、希薄だったのではないだろうか。

現在、身体的、精神的に困難や不自由のある人々に対する言葉は使われなくなっている。これは差別問題の解決に向けた努力の成果であるといえる。たとえば、足が不自由だが、明るく健気に生きる少女を主人公とした名作があるとする。その題名が「ぴっこのピッコ」だとしたら、長く親しまれてきた名作だとしても、そして語感の軽快さが魅力の一つであったとしても、そのままにしておけるだろうか。「えった君」や「ピッコ」に対して悪意はなく、名作として親しんできたから作品の重要な一部も変えてはならない、と私たちは考えるだろうか。

『サンボ』問題において、差別問題は他人事で、加害者の立場にあるという意識は希薄である。むしろ、読者としての立場に終始し、読む自由に対する規制の被害者の立場になったからこそ声を上げているように思われる。

径書房の『「ちびくろサンボ」絶版を考える』の後書きで、『サンボ』を出版していた出版者に話を聞こうとするものの、断られ、たとえ話を聞くことができたとしても公表を拒まれる苦勞が記されている。こうした出版社の事なかれ主義的な態度も、読者を釈然としない思いにさせる一因となっているだろう。唯一、岩波書店の安江良介がインタビューに応じる。しかし残念ながら、安江の態度は、かなり感情的で一方的であり、読者に反感を抱かせるような印象を与える。彼は、絶版反対の意見に苛立っているようでもある。彼は次のように述べる。

差別という問題については、名作の側に立って判断するのではなく、差別される側に可能なかぎり近づいて判断すべきだが、そうした立場に立った発言はあまりに少なかった。これは「出版社」対「読者」というだけの問題ではなく、日本社会全体の問題である。在日朝鮮人の差別

<sup>54</sup> 東郷、176-180頁。

問題について運動すら起こらないことに悲しみ、怒っている。名作だからという自分のイメージによって、これを残せというのは、日本人の傲慢だ。在日朝鮮人の子どもが殴られているような時に誰も何もしない。そういう社会が放置されている中で、その成員でもある読者一般にゆだねることができるか<sup>55</sup>。

安江は重要な指摘をしているが、彼の態度により、性急な絶版に対する読者の違和感や抵抗感が残念だが、解消されないだろう。むしろ今日では反北朝鮮の風潮の中、差別問題を考えるために、自分を加害者とみなしながら考えることも、被害者の立場を想像してみることも一層困難になっている。差別を考える機が熟したというより、むしろ国内の格差社会化も相まって差別があらわになっている現在の日本で、岩波書店が絶版にした『ちびくろ・さんぼ』が復活したのは、単なる偶然と考えてよいのか。

灘本は 1999 年に『ちびくろサンボよ すこやかによみがえれ』を世に出し、この中で、差別問題は差別される側が被差別意識を持つ限り解消されないとの考えをかなりのページをさいて主張している。これは、彼が「部落」外で育ったものの、祖父母がみな同和地区出身である立場から言えることだろう。平等社会を信じることのできる「平和ボケ」した社会では有効であろう論理も、この格差社会化した現代の社会では、十年も経っていないにもかかわらず隔世の感がある。

名作を人種差別という「歴史的お荷物」から解放する改作という努力も、前述したように原作の持つ問題から完全に自由になることはできない。名作には、名作ゆえの魅力があるし、多少の問題を抱えていても復元力があるだろう。しかし、心または感性を重んじ、好きだから、悪意はないからという理由で、慣れ親しんできた版の『サンボ』を復活させることは、「すこやか」なことだろうか。

村岡は、客観的な態度でアメリカおよび英国での『サンボ』論議を紹介している。そのなかで、日本と違って多人種社会での児童書のあり方を模索する流れのなかで、他の作品との並列で語られ、日本のように『サンボ』のみ論じた文章が何十と発表されているわけではないと述べる。そして最後に日本の状況の問題を次のように指摘する<sup>56</sup>。

古典作品のなかの人種差別的な側面を現在の価値観の中でどう考えればよいのか、という観点で『サンボ』問題をとらえるならば、『サンボ』だけに話題が集中しているのはおかしい状況だと言うほかない。

(中略) アメリカ社会での黒人問題を日本社会の中の問題としてとらえかえす場合、また別の側面も見えてくるように思う。なぜならば、日本にも「単一民族神話」の下で「見えない人間」は居続けたし、これからも増えようとしているのだから。日本はこれまで決して「単

<sup>55</sup> 径書房、120-132 頁。安江の怒りは、彼の在日問題、韓国の民主化運動、北朝鮮への強い関わりと使命感を考えると理解できるが、残念ながら、現在の北朝鮮問題とそれに対する日本人のきわめて感情的な反応を考えると、一層反感をもたれ、理解されがたいだろう。

<sup>56</sup> 村岡、95-100 頁。

「一民族国家」などではなかったし、これからはますます「多人種社会」化・「多文化社会」化していくだろう。日本人の問題として『サンボ』問題を考えることは、そうした流れの中で『サンボ』論議を考えていく姿勢をも日本人に求めているのではないだろうか。

『サンボ』を社会全体の問題として、より広い視点で考える態度を私たちは身につけたのだろうか。村岡の指摘は、安江の主張に通じるところがある。しかし、むしろ旧岩波版の復活は、差別問題に対する意識のありようを象徴するものではないか。歴史的な背景に背を向け、差別の指摘に対して、無邪気な「好き」という心の問題として旧岩波版を懐かしがるのは、幼稚な態度ではないだろうか<sup>57</sup>。問題があるからと取り上げられたおもちゃを取り戻して自分の世界に閉じこもっている子どものようなのではないだろうか。学校でのいじめはずっと存在し続けているが、いじめのある社会と、差別はないとの理由での日本の標準版復活はまったく無縁なのだろうか。問題があると一度絶版になったものの、名作にふさわしい古典的要素をもつ作品で日本人に親しまれてきた版であれば、復活もありうる。しかし、その場合、成熟した態度で問題克服に取り組む社会という前提が必要なのではないだろうか。このように考えると、旧岩波版『サンボ』は、すこやかによみがえることのできない時代によみがえったと思える。よみがえらせた力を検討することなくして、復刊を歓迎するのはすこやかではない。『サンボ』を愛するのならば、ひそやかに思うにとどめるだけで良いのではないだろうか。

---

<sup>57</sup>2006年7月、アメリカの全国有色人種地位向上委員会（NAACP）のサンノゼ・シリコンバレー支部はソニーの陶白色プレイステーション・ポータブル（PSP）の広告と PSP 用ゲーム『ロコロコ』への抗議声明を出した。陶白色 PSP の露骨な人種差別的な屋外広告に比べると無害と思われる『ロコロコ』は『サンボ』と共通する点がある。悪役の地球侵入者モジャはドレッドヘアの黒人のようで、その親玉は「オジャ」、子どもは「コジャ」という名前だ。NAACP は、 minstrel・ショーの黒人を思わせるような、人種差別の非難を受けるような画像を用いても許されるべきと考える会社がいまだに存在しているのは受け入れがたいと非難している（佐藤雅彦、52-53 頁）。この件も日本人の意識を反映する一例であろう。

## 参考文献

- バンナーマン、ヘレン：The Story of Little Black Sambo 灘本昌久監修、径書房、1999年
- バンナーマン、ヘレン・マルチェリーノ、フレッド：『トラのバターのパンケーキ』 せなあいこ訳、評論社、1998年
- Goldthwaite, John : *The Natural History of Make-Believe: A Guide to the Principal Works of Britain, Europe, and America*. New York: Oxford University Press, 1996
- ヘイ、エリザベス：『さよならサンボ 「ちびくろサンボの物語」とヘレン・バナマン』 ゆあさふみえ訳、平凡社、1993年。
- 今井美都子：「“Sam and the Tigers”の研究」、インターネット、[http://www.jscl.internet.ne.jp/jscl/record/regular/regular\\_6.html](http://www.jscl.internet.ne.jp/jscl/record/regular/regular_6.html) (アクセス 2006/12/21)
- 子どもの本の明日を考える会編：『「ちびくろ・さんぼ」はどこへいったの?』 子どもの明日の本を考える会、1990年。
- 径書房編集部編：『「ちびくろサンボ」絶版を考える』 径書房、1990年。
- レスター、ジュリアス・ピンクニー、ジェリー：『おしゃれなサムとバターになったトラ』 さくまゆみこ訳、株式会社ブルース・インターアクションズ、1997年。
- Luscombe, Belinda. : “Same Story, New Attitude” *TIME* 23 September 1996: p.49.
- 森まりも：『チビクロさんぼ』 北大路書房、1997年。
- 村岡和彦：「アメリカ・イギリス版サンボ・ストーリー」 『「ちびくろサンボ」絶版を考える』、67-100頁
- 灘本昌久：「日本版サンボ・ストーリー」 『「ちびくろサンボ」絶版を考える』 32-66頁
- 灘本昌久：『ちびくろサンボよ すこやかによみがえれ』 径書房、1999年。
- 佐藤雅彦：「人種差別で商品売り込みに狂奔する世界企業ソニーの憂鬱」『紙の爆弾』鹿砦社、2006年10月号、48-59頁。
- Susina, Jan : “Reviving or Revising Helen Bannerman’s *The Story of Little Black Sambo*: Postcolonial Hero or Signifying Monkey?” *Voices of the Other Children’s Literature and the Postcolonial Context* : Ed. Roderick McGillis. New York: Garland Publishing. Inc., 2000, 237-252.
- 東郷茂彦：『「ちびくろサンボ」を、なぜ子どもに読ませたくないか』『「ちびくろサンボ」絶版を考える』 176-183頁。
- Xie, Shaobo : “Rethinking the Identity of Cultural Otherness: The Discourse of Difference as an Unfinished Project” *Voices of the Other Children’s Literature and the Postcolonial Context*. 1-16.